春日聖

坤

内閣文庫
昌平坂學問所

夫日記

御近事上東門院

昌子内親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あさ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是ハ一のさまなり是をなほ古かしたるはあはれ是らを心見てたゝし
ぬへし業平ハ殊に述たるをよくしけると
一古歌を見るに一の大事に上手にてあるはこれあはれといと上手なるぬ
人も古歌を見て人も何も上手也中にも古歌をうつぬもありけり中に
二のやうありけるハ詞をえて心をとるへしとかくハ心をえて心をのつれて歌を
えらるも有詞をえて風情をとるへきにハ風情をえることハ先見るへ
し心をえて歌をかふといふは古今の歌に
月夜よし夜よしと人に告けやらハこてふに似たり待すしもあらん
と讀るを万葉に
我宿の梅咲たりと告けやらハこてふに似たりちりぬともよし

といへるを取り是ハ心も詞もかはらすして梅を月にかへたる
ばかりなり
詞たくひなき古歌にかきくれて詞をえて心をかへたる也又萬葉
の歌に古歌を詞もたかくて世しらす讀るも多し
ひと毎に言神の夕けくもいかなる風さかりなるは
と讀るをえて詞ハ夜の霜の夕けくとも讀る又
是ハ山路の末の霜にもて音信ることもやめへきことなし
といふを山たかみ雲ゐに見ゆると取りめる是塩焼いと見るこ
そ…けのおくらと見えてこれハ見つるをあきいはれやきいと尚
あるとハと取る又江戸のあはれたかきこ路もあるとある之を

よみはへいふへき所々をもしらすやあやし此為家とさなから
歌をよみもとりもなくとよりて又もろへたるる山の井のといへる人丸か
むすふての雫に濁るとせえこたく山の岩かきしみのあふれもあるか
といふ歌をとりて又この浄山をもかくゆら紛る加はゆかしきをせ
えあり給ふ又こゝに出ていふぬをいへる人丸の万葉の
古き詞をとり古今に後撰拾遺に用ゐしといへる後撰集に
つらぬるゆめ中にあること、はしといへるをとりて又たくひなし
数ふるは上古は如此中比は歌はいまもうへる世に又見し
ちかくも經信卿
さこよし此松を秋風吹ぬるこゝちすといへる兵部卿隆

といふをとりて
奥津風吹にけしる伊勢の松の志度をはらふ白浪
とよめるかくのことく上句は中なりしきとめつらしく耳に立てきこゆ
とりたる古き歌をせんとし手心も詞もなきを述へ此を比べ
の麓とかや右外にある式紙云
現大身満虚空現小身入井子といへる語歌には
家屋の内をみるなるから桜をちるをいへこそさこめ給ふ
東三條の大臣此歌をかさねむ花かくるやといへるみつね志もかく
此君は花いとゞ濁るものしちらすき世の定めなきなひくなりといへる
こゝろなくさくとおもひさなから　とよめるも皆古歌を取れる法に

あるは自然の面白き所ありて古歌に詠まれたる所あるを人の不審
しるつのるのみにも我も発つらしくよそらんまねとるべくやあ
らまほしき世の人の今は歌仏教に成れる風情詞もよろしくしてさ
ぞ新らしく能るものあるべきなれども歌仏を捨てたよりなる
歌は第の人のかたらるるもきまるとは上手まねまねあらんとて
おそれ侍りける方第の詞古歌にあるを面白をとらふかるべ
きこと侍りと能侍るとは知れども歌はあまりまねあらんとそ
るむ物こそ侍るなれ上手のまねをしたるこそ
大うとるるみさらんは古歌の詞にあるをいとを進の
能をるるよくくさうらふ〔しとい〕

一歌は大なるあるてをるを云ふと云ふ事ちからも侍歌仏教
まもられて八十四ちかてとふる歌をそそそそ社さしあふとあれ
ともなほ今もすしをこのたるひい空裏のてとく多く侍りをいて
うえのやうをたてさるなうう亦ちるとふものかよひあれいう
仏もいうてくるのうれとい一とやうよりはてあるうんはえらし
只歌よりなるうぬるは必歌のあるのるてこそあるきみ仏文やる一毎
一みやるるも能もあれそもやるるあるあせ移りて年三三
るるを毎月やるとるはいは神るをいるるみやる侍るきは侍り是にて
ひとうは拙るをふうつるひきまりてつくるるるはいと上るは仏ふとせあ
るなう

一ことに林葉集をさへ顕し歌合にあらはれハかくての難ハさらになけれ
よくし思慮ありし君の佛道ハ家の林葉集にみえたるへうれ侶らの
のときめくハ勝となりし中に又上人の中にもちハあるし忠
峯林葉集に傳てみつ身に難せられたるき
白雲のかかれる山とみへつるはこれ(?)にきやちりまかふらん
とよみて侍る歌ハ千載には又堀川院の御時長秋か歌まいらせ
ける歌に花ノ部にといふをもれなるいかにしきるす
侍り同陽(むき)院の中宮の花合なる仲実の歌(哥)にたち(?)せしことの傳
るみなもちゐぬ歌のうちに昔今あるし又堅なる北さふひあり(?)に
前言の歌に月詣集にいふなりとみへこ菅原の朱いり歌合に

我やとのその桐なる説とて傳るもの見当たちあり高恩
つたへ来の歌にはさらさらん自然なるなき又かかるなりもふさたしなるはも
侍り 弘徽殿の女御の歌合に 永成法師か歌に
君か代は長柄の山なるのとさへ白浪の数あるにぞ見ん
とよめる返しも此の部のうちにもみも御法なくて今昔集に
入たる撰者大なるあやまち 撰人ハとにもかくにもあるへく集
を撰ぶものひとりの心ひとつ難を見とあやまりて 入侍るなりつきつき
なきことして今昔集ハ歌なるものにてありしの名なし
はきて御法せられたるあるきの中に武蔵大掾なりて国おさ
見ちつきありと名つけ申す東国集といふ心 付見ハなりす

たちまちかるのしるまるをはきうの時ぬ人のさしよりたるものもるき
山ぶまをはの一人うつりて撰ひのひとりかくひう妻をまき
ちまうとぬのへかやあうはとはんせそ一人にてちうといそんと
高法師（たかん）しの時うをひとりはけたしるぬのるもよくおもひ
そうらふにしそをもるへあれは雑となるるをかのるきるなれ
ともまるけたをまれえかをてて絶人のさをさせ時ふきう
一そうるき名所并詞
山城国　さうら山　はるかの時のあうらん　よりみと童田を
名所まも時のるふ漢をもるてるう　ふををのくいそんと
時うしき名所をふのくおもひうらうそ

大和国　神おうら山　いくうら山　たうわら山　うらやちるを時ふ
かれぬ　生駒ぬををのたうて　たアのを山るをいむと　多辺山たての山
うちのおふの万葉のたまきそうとつるたうら　たつまるきの里　時をのいけ　さうらう
伊勢の国　たをの海　とうら川　うつせ川　あうら忘　海の浦
ちまあうらせ　あうら秋の月をみるといるを時なれそ
それを秋と万葉ふ家せとみう　ありき方をれそとを
をいまし也
いそしろの松をるのおうら時ふ　梅ふ中をそはふ漢をそは時ふれ
ちも也をるをうをあるて　うつせをの世　きをうりう
婦うの海生死の海　かををの名　あしををれ　ゆをのあうかと

ふらくのそこ　ちこきゐとは蓮台とは硫黄とも　然あまもよむへからん　古き衾

古き枕　むつましき衣　さきうしろある　今はのうら　芭蕉んとは右下いへん

あるとまさに　あき風ての世　えるちら　むすき煙　のわる家

ふ候

あとたかるむし是は老のあるも　いにしへの私　たまきは歌　うたかひ給

ちこく来る　日月右こ　古きすさまし　是は旨にてつれしむ平こ　仏例あり　仲平公伊勢よ

寛平の御宇古きすともいへともむかしの歌人のよみ

一　歌のまきといふる先例なきを能く似たるやうなるに経歴る

也　似たる世もなきを見て古人すらいにしへに遠ざかれる能き世を

ハ流しく　あさてのこと

兼曆の歌合にかかる歌ぞや　あまりんと侍る　経信卿之非

僻案に年ふるよみて歌へ　年ふるよみる文字はいとしこころえてよ

むつまし

一　古き近衛とあるものへ　とある歌に文意をとるゆゑに不審

する物あれとも　哀てはいかにもやあるまじきもあるべく

一　簡河院の中宮の御子花見の遊びに歌ふて　御物語をまうす

千とせまでおりてぞみる老い　桜色とおりての詞あきまじき所見え

たりのことなどよるはいふまことにあらた　禁中まさにておもとといふなりまでを

いにしへめ清備の例をひかりこふ北歌を所にて

みるかひもあるべき桜色と深のひろ信家のなる歌ありて　かつ

わかる之年の名と衣いむつまじく古例のなみなるわかちうちはかりなる

用ることなれども
一樹うつるこゝろ　はるゝえ　あるべし　侍ること
のなるとい　皆白梅の花又世ふかく侍るなり　左右なくよ
をたにのとなくハ侍まきこゝろ　北多れを思ひ出る侍
不注こゝろなくてそうらふ
公富ハ京富とハよるぬ　但天徳の歌人　紅梅　見富
の梅うえるゝ　侍　自撰　自理　ふさ
哥　兼房の侍　ふと侍
うえさせる　人　ひとえ　入　又　みを
るハ　梅の名ハ　侍

二歌合ゝ
のこゝ　歌ハ　のみ　侍　こゝ　侍
ふ石　入　歌の　侍　こ　去　侍
高　侍　匂　大　侍　池
上月　侍　侍　侍　池　侍
侍　侍　侍　侍
山　侍　侍　侍
侍　侍　侍　侍　侍

ことものさまも心詠るわたとへてみれを要井るをえころよむるやく
一平懐之等は二字あり家としゐをしあまみくまれかきれ誰ら之
みもまもらしはてそもらは無くる故まれしハ中ゆゑくみえてをそえ
んもこそ古人其思しりりくうらりうりく詮ら古き詞よみえとて
あめく好ことよむつうれと先達の心得しるすり
一安陰清能或日凡和歌者先花後実不詠古徳并聖賢之所
名并物異名但花之中求花珠中揀珠之不違名所なと
よむるハよくしらそれて非也たゝてよくしてこゝろもて花は実あ
或も吉他須臾吉野山里秋葉まふ能伊山月ふハさらにふ
あて様浄足所不意涼詠旅江まてた草あって心ゑまて心ゑも

こゝろえ侍るへし名所まても無左右ハ讀ぬへからむ
一公任卿云 古事難去所も相ていきて年といひその理を
いひきこらんとせられるそ元来ことうめくよろあけへあるうちうち
あらめくるまて何と形くいひいもすも惑んすも叶ふるまてそ無能ふ
まなりぬれそ支詞姿のあるるはいきのそひくる也持るへある也
たとへえ其大の花のあうつ上一西坂たるりつ秋の月のあまゐのあを
みのうま時りうきき吉野の桜よ古風のまかなひさえひ峰社義光を
出るのららそき村雨の晴行也ま亦雲の方あうちきえ
藤の字の雲かけらふ先ゝ依まつもるる落る空のかけきみえし
きりきるとさるやうなる草のららひさをそつるもう人ことまかやう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一初一三一同とふるもきこえも　きりはなりきとふ文字

きこえよりもときこの字のきこえるこ

一二四同とききこうこうとこの字のあるきこ

一五言第四五七言六七とふるもきこふもきこう世のひときみよりこ

一毎句同句ふるもあるもふるもくくとこるもう

一八病とふるも同仏孔四蘭蛙清鴛花榴老風中飽後

悔ふこ

一同心ふる留ふるう

あるかの毎人ふこけるもあるもうえきはきこつのこるさふるう

ゐきさもみきえも同一仏也

一孔恩八第一のこ一めの一第四句の姫の一字あるもきも也

[illegible]さ山ちかく心よあらたにて今宵の月を見さらぬや

一禰陳が初句の一字平声五句の姓の一字なり

掛ける本地も仏のことにて世をもとる小あきをそなふる

一詩語の平声の句の一字隆の一字隆の七字は絵の字なり

みと金てハ金山四の花らみなるも意きあるのかゝみもせも

一花鳥ハ名所の絵をかくたとへハ菓を絵まえて菓を

いそんをはかくもあんをおもてきかゝよると強て菓とそら

せんと思ふと月を絵ゆえて心のつきてなと月とそらせ人を指さ

かゝるのなるべし

一老枝を絵をよこたゝるさあるこたとへを絵をとて小くる山

の下ろくをめすをそなてあ花を絵をて吉野山のあるる左ハ

のよしをもてなをきるなる呂一枝さけるなとよ海人なるを

いふなり

一中秋ハ三月名をなえるくふ三月一なる七文字を八月なるを

をいふ

一後悔ハ心を言葉もなるをとうさい花を世八人をもも

やさしくもなるんと後ゝ悔をうる

罪病ハ病如此連句病をなる一なるのをなるひらるをを也

たとへハ春の花の夏の秋の神のようをを抜言葉婚

ふなりゝ又ぬを女なをて嫌ふたとへハいハ小ぬ世あ小きに

[illegible]と云あるぬこゝろのぬゝなるとの[illegible]二本[illegible]と[illegible]
[illegible]とあるとそれきゝ[illegible]みてゝ[illegible]の[illegible]とそ二本を嫌ふこと
[illegible]とあるとあんと句を[illegible]に[illegible]といつくへ[illegible]
あれはなるもの[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]句を[illegible]
[illegible]又六文の[illegible]を[illegible]句を[illegible]嫌ふこゝ[illegible]
句はあるとたの[illegible]ふ[illegible]

五月雨[illegible]の香をとあてむすの人の袖の香をとる
なくさをしのの人やゝ[illegible]き

[illegible]はあるとかをあるとの香[illegible]あらひす
あるを[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

嫌ふこゝ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]心[illegible]ふ嫌ふ[illegible]
又字[illegible]句を[illegible]ぬを[illegible]嫌ふ[illegible]
又字の[illegible]別[illegible]を嫌ふ[illegible]

今[illegible]

七月[illegible]の[illegible]月を[illegible]
月を[illegible]七月を月次の月[illegible]
一[illegible]ふ[illegible]の[illegible]を[illegible]嫌
[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]字[illegible]の[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]

歌の所のるゝこゝ能もあゝくもあるとつゝ
二王下四人そう五上四人そう七こと上四人そう七こと下四人そうとて
嫌ふるあるをとゝ隆るあるみあひのらきやうそく此へんの事ハ
嫌ふくほうの病さうたハ人まをえもうの祈をつゝしみを学の
病をあるさをやうよりあるいうちゝ病をたちぬ一大うる歌の
あるる外をいきれるゝし歌るあるさの歌あるへくと
一万義ふ集ゝさうとんをゝふ山然の歌こそんをゝふをかるくこの歌
ゝ病をらひもんあるいみをゝ病をみるまあるハ水ぬ歌の病あ
見ををさうるのをひるうるゝ見一うゝ心ゝるあを数あまゝ見
ゝ作をさうて病るハおるゝ此へんのよゝ作きゝもあるゝ見書の

世の人のあもちさるきるのうまうゝをうゝ古き見ゝも
ゝ水ゝの病をきりて病るゝをくゝ人ゝもさるゝしゝも見ゝ見
おゝゝこゝゝの病の同みるの病とをさるきゝあるおゝ心の
病をハみるのうさうゝ水ゝも心のおゝきゝたゝて強病を
山さゝうゝ見ぬるゝハ法をうゝも見のゝゝをゝ病ゝ
山ゝと時をゝ山のゝゝきゝを時をゝて病のあゝし
ゝるゝゝ世るるゝふゝゝ人ゝ見ゝう花実まゝ変るるゝ
見ゝもゝ年ゝゝ年ゝを病ゝゝ
伊山ハ数るゝし外山るゝ陸きのゝゝ色つきゝ
見ゝ伊山ゝ外山ゝゝ

咲きそめんあしたの梅をおもひやるべしあらん
[illegible]十三年直子[illegible]俗[illegible]人[illegible]流の字二カ所を[illegible]
あつさうおもてもなるふ降ぬあるさ[illegible]ふるふとうちつそん
いふふかぬそ[illegible]ふかふもなき病[illegible]この[illegible]ハみちを集
又[illegible]ら[illegible]人の[illegible]の[illegible]中の心[illegible]
[illegible]
世[illegible]の[illegible]あるそ[illegible]
きそ[illegible]やら

[illegible]
けらしとなるとの[illegible]

一奇[illegible]の作

長歌　経年　旅[illegible]　[illegible]　迴文年　[illegible]　折句

[illegible]　誹諧等也

一長[illegible]
[illegible]師匠[illegible]人[illegible]経年[illegible]中[illegible]
[illegible]八[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の五文字より六字おくれ[illegible]
[illegible]の[illegible]もすくみ切られぬれ
経とよるの所を経ぶとすといふあく初よりとなく
[illegible]の所あるなり三代の御門の時[illegible]
を注きに仏経ぶハ混中ぶとて仏書より後
[illegible]ぶ[illegible]混中ぶ[illegible]又仏ぶ[illegible]
五七五下[illegible]ひきをと後世書きて[illegible]と思ふ世俗の五七五七
かきあるふやうにとあらば則[illegible]を三十一字とはなるべし
[illegible]又三十一字をいてるはくまなくなるべ[illegible]
思ふ世ハとをかるべ書[illegible]ふ[illegible]
さ[illegible]ふあるとも神をあらせ人と同名の時の為に注[illegible]

人麿ノ経歌

奥山に　あれぬる年を　宮のうちの
年経て住し　伊勢のあるを　永きうしろ
こゝ地して　よんさなく　かなりきる
あるものの　ものの　世ら山の
世なるて　秋の紅葉に　人とさ
おのうち　[illegible]　たのむのさなく
なりなて　とあるなる　花をこき
[illegible]ふ　[illegible]　そらをまねえ

たゝ島の　あまさらて　よそにこそ見め

是旋頭の歌の名目をさらることを注さるれ実例もあまたさく
見ゆ、くだれは　万葉集の中に六文字ある句を二帰ある歌
あまたなり

　　かくれぬ　すける子の　中にかほきて
　　ひさかたの　月こそ　光をなれ
　　あまの　ちゃう　ぬる　似てなれ

是もまた連歌の注さす

一旋頭歌といふ物あり例の三十一字の中に今一句をかへてよめるを
云文字をも是は古き世にはそのかたちにて新古に漢人の心にて
あれとも　三文字ある二ある事見へ侍らは讃んてもも一種の体に

　　かのここに　そこちる　うけま
　　たのひふて　こゝろ　こそ
　　えらぬかきるり　あふこころこそ

中に七文字を入たる歌あり

　　かの岡に草かるをのこ　しかなかりそ
　　ありつゝも　きみかきまさむ　みま草にせん

是八七文字を中に入へし也

　　うちひさす　宮ちを人は　みちゆけと
　　わかおもふ君は　たゝひとりのみ
　　思ひくさなるゝ　あるまし
　　たとへれとも

是八すへての七文字を讀てけるあまたあれ　もとはさも
かゝれ侍り

一混本歌と云ものあり　例の三十一字の歌の中に今一句をよみ
さる也

是は末の七文字をよまさる也

あさくさの名所
たかちやまき
たかの名そうし

是のうへの
弥生を行くえ
まつらえとのこ
あかふこころの
あるもれを

是を中の七夕のことふあまうて　えての七夕宮の白なきまう
是も彦星のさてうこうやうこうて　三後たう

一あるとの詩をとふものゆきをみやるあの名をそらのよふ五て
濃るまう小野宮ク人ゑたをかるみやるとて　ケをる
たとのえも
ときをるをえ
たのアるん
やうハみよし

是をたちうやと

是をたちたまとふみをのをのよふをうう
近ーまことをなりとあるー　今のうへ　ゆて近ーるまう
たとのえも
とこちかうこ
をるあうる
ふうくは人に
たうにたまあ

一又かうふりのあうのあるとふあ
あハせときもれをこーといふるたう
あふさうを
をそハ
せきもいを
たつ多てうひと

きみなくさし

是ハ仁和の御門のかくしみなかの結ひをしける始ハひろかりしを
みやこハと申ける御方よりたきすのを書いてをしきけるにえこころ
あるすみ思しめされけるを申伝へり
又初の三字を結の三字をくつりまてよみけるあり其家も其家
ありにし

是ハ上下のそゑるをきかハ
さくさるによみけり
初の五文字一字をすえて
十七字の一字を
よみけり

たのしきをきゝ
見し我身にて
なかく思ひ
こそあやふ
たのしきハ

らゑる人々の五文字を大事こそあれ外にも海とゆかりて

らちの中にくさある結ひをかくの文字のうちちの
まんたへのもちを見る事ありしハ但よむ時ハたゝとくり里
ほかるさける結ひを一言きてもとるべき事に思ひなすそ
ころいハ源も其ありとやらこそ再讃おもむき雪の月しろ
是ハさせる事もなけれともくつりかける後にも
跡のある人を今ハ初めかしきおもひしうらうらハやはらくぬ花を待れとも
けくハいかるハらかる人々大きなる事に多くへだまれさるものなり
一句又とも結ひも上下よりとおもふやうに待るべし是ハ小倭の尾
ならむ
むかしよりさくこるハすそこるハおそしもその前のさくまさくらん

[illegible]

いたい　ろくろ　はしは　にーに　ほくほ　へをへ

ゐると　ちまち　りあう　ぬゐぬ　るとろ　をーを

われわ　かをう　ゑるよ　たつた　れれ　そまそ

つまう　ねゐね　たつな　らこら　むうむ　うろう

ゐくろ　のちの　たくた　くこく　やとや　すやき

けふみ　ふふふ　こここ　にてに　ててて　あのあ

さきさ　きこき　ゆるゆ　めすめ　みうみ　しるし

[illegible]

せこせ　すくす

[illegible]

一階一部とゐむあとゐつまをとあるいさてゐる蒙こうくす

なるうひちまきを陽一ちるるうう

たとーもこそもかいこて　ちきそのそそるもらひきとちる人ねるき

あるふ豆の毒ろくこいこるう

くさも蒙もこれみうるゐるめ　ぬせろはあゐ毎度のそやさ後くゐ

一辛と豆ゐといふ事ゐ

こうこそゐとをる口をれこうこうのあこいこう後こうう

一をんるん

秋の夜は あるもあきらるる世をもあるとて　花もちるべ

一題芸

是は京のうへにをいふるうきいはあてたるこの人のあたり見えて
おりけるはたをえくるきるこ　遠もやうこたるこそはいの人の遠る
をもいるもいるるもいふるの詞をうくてかたるる者心を
おるるるなるたとへは今の遠るをもるるるうえ杯
いるる遠るるもいるるもこいたるもこ　又為のるもえた
るるいふるいふるの詞をくてうこたるもみる心もある
るるれるたをえをうこて遠る　るり春は濃を遠ーのいふ
のるるきもみるる

一欲を耳眼鼻舌身意のあてて　結るるもあ

眼　桜を見るるらしるなあひきの
山のうひよりうえ　やるるるる

耳　外うかくよとこ弧ちせ　ひるの
るるこをきけえあるるせるをて

鼻　るのるもよるるるるるるるる
けるえうるるるるるるるるす

舌　あるえるるるるるるるるるる
うきこをちるけくるるけるるる

意　るきるこをいるてやるるる
こるるのるるるるるるるるるる

是を文の義をあるれ位をれる大をを計ちるるる

一和をとと和をの風位をれの師川きさいの宮ををーめるる
孤ばを所の男　物世をいるる遠もたるるるは位もをるるあん
やちの水を天名を皇世をるるくーこるるるるる嵐あるをるえきの

歌舞会とふふの山中なる木の丸殿を作りておそ一時
なりを本の丸殿といふ丸本なる作法なりう大学寮の学の男
本の屋を中世の殿作ふる作るなかの例こ民を殿八子に
言作も儉約なるべしと言上しなり唐土の学なるつらねて
しらをもちるこのやの家をゆすりなるためこあるの本の丸殿
ふ用心をーなひりなる入まる人八必名字をーなるためこ
あるの凡なる 什家をなんよる殿うり
名字をーて世八法なるを
天竺をの八紫なる是を民ゆるあてうらるるめるう
まるこ まるこの風俗もあるに定られきる所延長無の

神楽の舞なるこ八られなるこそ新人会なるなるてをめるを
秘伝こ大方 舞学なるを必要とれめるこきに法世ふ法の学を
拵なふへるを成人のるるく有文人の学なる作るものハはなき
ものあるもきらふへるを文言山をちいきつらを作を世ふら
に什なるこきるをなるを世をふきるを作をいるを什家な
ふるきるをなるとを明宮の人をたを法ふあるるを
つくるをたるふ法なるをも経かも毎る心なるを文人食ね
を婦なるなの化をを必屋ふをも方大仁八必ーー
きを婦ふるれを神ふ化ををあ法なるて
きるをも学なる屋をるるなる化をもうるかを神ーく刑をも

かつてあ方ゆく元とし きめてをおとこ(しとう)
こえ人ゆ一ゆのうちあれはうとておもきつとをおこをふるようおもひ
斗(し)雑雑とゆかこきはるものつう(ゆのあやまちか
きよあるん人とともいうてを理ゆをるれるん結はゆよい(るうく
ゆとうゆゆう(て)愛ををゆる(しとこをとうあまうくひよ(て
るゆもるゆ力ゆきゆ方ゆ仕君ををううてゆの枝をうゆ(ゆうを
あきゆきてを縁をのをこおうゆをるをやうゆとをふうくをゆ
をく(しを女侍人知るを上方夢の者ふ進といひよ浪ゆ
をゆきゆ孔雀のさを(ゆもまあれるゆしゆるゆをるゆの
雀はの夏ゆ情のゆきうゆふあゆを思ゆをくゆるんゆるのとりを

ゆるゆ一純ゆをゆ雀をもあゆ花ひてをこゆ(しこ花ゆ雀の
ゆををもあゆをおもひゆをゆ結ゆるゆうゆ世ゆ方ゆ結ゆるほゆ
あきけうふゆ結し

一天方仰るゆも答を答ゆ人ゆたゆ(しゆひのおゆ(ゆゆも
人のおもひゆゆをゆゆゆ結ゆるゆの純結ゆるゆと答をゆゆ思ゆて
あゆゆゆの者ゆをゆをゆこゆをみゆて浪ゆをゆ人ゆゆゆもゆの
ゆ仕ゆ結をくゆめゆん稀ゆもあきゆゆ支幹ゆもゆ(純人ゆゆと云
所ゆれゆれはサ(の夢ゆれゆゆも世ゆも人ゆゆも必ゆを元ゆをゆゆ
大節ゆゆ者ゆ八ゆ稀者ゆゆゆゆの(ゆゆもゆをゆゆ(

楚思滑 水流 茫雲水冷 高声清脱管絃秋

叶詩八頌声聞師よくしと雖も人あり花も秀句なるよ
り四条大納言公任の朝臣撰集のよえらひ入られ侍り又長者八
年三十餘の齢今よ
あふぎてとせめて命のたに花と思ふ人のいのりをり花
春花の色三つ見さきもちるてかちまくあすの間の嵐の風の
もゝ寄る北野の梅えの風とらめさるるや人のあるさまもけさて
行ふ
みるほどひとうらさへの中ふなるくし
宮ゐ宮師を一条院の后宮中の関白道隆公北方嘆く
うの后師るやうおもくるせ給ひるる況
あるとちまるに幸をとるとはこんなるさの名をもひき
とうきて師きてうの死もるむらひつけさせ給へ申るるを
うけ給はて　後院師一つけうるる石の中さこ
そ去のひうるくいえさせ給ひきあとあるをしら
ある殿上人ふ五月の井るあるうの況いとくるうるるやむ
ことなき后言よ出りてめんうるなたさうるるうよう
人のきのあるさしられさるひきくれて聞きけるよ
況体のやうれよ宮のあるくさうをえて先るるそる世界
やうーの宮やあつあたうんやうるうこと見れとくさくるる況
るる人ものうるるうて宮火孔をと井師るるみ又つきて

夕顔宣旨とはさきむきてそうろうへかたぬいハ
のをるやうに猶ようらうとをもくるまきく西京け
けちまもといふへ姫ちうんていちくこ孫をまきを一色
うらうかハさきかるる女房ものあを孫一宮うもこ恵のみうる
ようとはやくさいき者ちうけきもぶく者ちあうるすらおい
きのうもあうふいうふうくて化く宮えるる人うをうの
四宮ちも異ひうとをみうるる宮こ宮ひのたる
うをたくうくおくあのきはるる者て什人ともとくまい
うやさくうをあうるる什こうるを
ちもせてみさうもゆるる宮こをちくやうしあうるうう

とふこうるを什五人の女房ハ
天唐の国はあしつるの子人高仙のうちふ法華の元湖の姫
法華経言とふまうう一人ハ毒虫男伊勢大輔ら武部ち
るの内ちあ年院の内ちあ唐ううるる本ちうく
七さ女めひて宮ら絶しるふ重好宮の方極いうるんと伝ら
さ化ふ彼法が経言ハ法華ある仏ひるるやるハうく師篇を
四宮上うる人今の世をていうきたとくるひてくら化ちかし
かうるうの事度の白宮ま老の後什上のふもとる一の家言を
ちめて位絶ひうる舟絶る巫宮をるの隆ハ枕をそそとてゆ
秀姫宮年のをこハちて化を枕けてそうと方を師何伝さをる

[illegible]

世[illegible]

[illegible]宮の[illegible]人の[illegible]は[illegible]

男の[illegible]

[illegible]

[illegible]

花の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

事は空[illegible]

如載明墨譬張流擬赤鶏冠黄伸蒸栗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣新墓に詣でいそくきぬる比の夕暮
に親王の御墓のほとりにしき敷つゝふまたりとや新墓と
ひていそくとる待りけるそと間
くとせまてかまりる松もふるさと君をひ分て万代やへん
世まもりとやせとふ新墓たちらく添てかくる程を
とりて能宣をおてい給おもそさ新墓を出りて立上め
御るのはるいうなる歌を詠てやとさいひのふきん
るとをふるの歌を詠やとる北方のふきん
程立ら能宣まみて涙のをとまて用ををしきるこをれて
おかとれるをあるやうん又能宣ふれをとる方の歌

をふるるをひろうのるなるる一廣夏の年要ろうのあるを
人を遍照寺まを月をるる山家秋月をいふるをよるる立申
上範永卿をかをもしも歌上の中るて出ろりをを上らや
まく思ふらんとおぼ花ふ能のをるを詠り彼寺を出りて
山家秋月をいふるを詠ら
とふ人もなきふ里の秋の初を月のひかりもさびしかりけり
件の今氏の学案内を中納言をりて公任卿の出家しており
れ花をるる比山のを花をいふるをるやられ花ふ範永
ら歌をるる寄て学歌の本は範永ら伝人を和歌をる
をぬと立ら花をりるを範永感るたへ人を事をこひれて

殊の袋に入てたうるなりて首をみて拾うるなることを
廣説の中説あるなり中のなり中のなり中のなり
あるのこと〳〵くなるべし人の長きなるあ
抑和歌の道の心は古今集序に宣恵の二法天地の二世三世の次
第をたて迷のあるハ三二聖人歌とあり覚のあるハ三界三途
なるる四苦八苦を脱るる人間の四苦八苦をいとふ故なり
五句をとうる心義をたすけ五根を表るる故
三十一字は如来の相なれ
津の国の難波のうらも和歌なりて佛の心の法をきく
佛の五社雑説のるハ法をうんあるひたハむれ者とこそ
きく

計歌をうるなく佛も歌をよるなり殊に神道ハ神道
理をうるなるなるなるハ歌あるとなるなるなる
計理をおもひうるなり殊ひて一五と二五を掛あるなる三十一字
佛道三十一字は文と句こふ
多の中のうるふおるハ花をもはらうるなり三歩即是の
華はんはなるの花は高こふるを説しく今生百年の
ろうは和歌の用のるをもてあるひ出まるふよりかく殊
陸の花をあるるなる宝池の蓮みあるひて岩をるるん
よるるのいみ〳〵うるるとなる

右之言葉墨志以一身之所任而但懇願為銘
如之嘉從事須此言要之撰述為責任要必任此
銘係深ふつゝ之文和歌之全ふ伏冀刊妄後
然ろ冥存此数者清病之科為治其科撰之者
也深拭心底之及他見宜之
大宮右大臣俊家卿

左衛門佐基俊

師匠より右傳の秘事一生之可伝而但懇願為銘
以是之相伝より外名をとゝもき事ふつゝ冥
の底をかくして相伝あるべきくゝ宜しく

之條之在大臣俊成
歌道の判

年来ふ海計乃ゝ之こゝろをしれるすゝ者の
人まを為をしふきゝ之西新まりれる人より外
ものさまをすくゝ歌の秘事須事多事を世をそ
祖ふこのきあつまの心ゝ為ゝ世ゝ伝ゝ冥
の道和生をおもゝ世ひりてあ和こゝ之相後
秘し思ふれ之し

俊成女ゝ一の尼御前
義京氏判

什秘方八ヶ条外ニ無之候秘方ニ候ハヽ一ヶ条
為ニ本家ニ授ケ申候ハヽ代々ニ相伝ニ成申
ベシ毎年四月ニ相伝ニ仕ラ申ベシ
但家内のものにも教ヘ申ベカラズ
申ベキ者ニ不限り為ニ教ヘ申ベシ

秘方を為伝せんとて起請文を右伝授しさうろく
写を世ニ出すものハ神罰を蒙ること
伝授の者ニ同じ

妙阿判

右氏判

世秘方沈香丸
千駄木駄の珠の如くに保せんるを又再入の如
よりも早く宝を得て一家を第一ニ
てらせ人あらハ可伝授ニ
沈香家を号ニ言義を立して千人を為て頂き
七有如来を敬ひ日を求て雪山童子を
授ケ如くるるらん人ニ伝ふ一ニ若ニ外の人ニ
伝ハ伝ラ申ベカラズ
の為を為ニ人ニ生もなく死る不の仏義ニ逆ひ
後世ニ必いとの三徒ニ為ニ仏起請文

狀如件

秘方服不可傳之中經長書寫之進之早

努々漏及外見而已

正安元年二月十七日　前大納言為世在判

月の名比事

三月　弓張月　七日八日を弓張月と云　廿二三を下の弓張と云

八月　持月　十五日の月を云　いさよふの月　十六日

立待月十五日　居待月十六日　臥まち月　十九日

廿日　たゝ廿日の月　廿日以後八時分の月を云　ゝゝの月と申りも云